

補語構造「V見」に見られる文法機能の拡張と収縮

—非視覚・非聴覚・非嗅覚型「V見」の発生と衰退—

伊 原 大 策

It is generally argued that the Chinese complement construction 'V見' is used not only for the visual sense but also for the auditory and olfactory sense. This paper claims that this 'V見' construction had the usage unrelated to any of these sensory systems when seen from historical perspective, thus revealing its historical changes of usages.

1. はじめに

補語構造「V見」は「知覚が認識される」ことを表わすものとされる¹が、実際には“看見”（見える）または“瞧見”（見える）の如き視覚動詞を伴う類例と“聽見”（聞こえる）がその用例の多くを占め、これ以外としては“聞見”（匂いを感じる）を挙げることができるに過ぎない²。「知覚が認識される」ことを示すとはいえ、いわゆる五感のすべてに広くそれが適用されるわけではなく、視覚・聴覚・嗅覚に偏るのである。「V見」の機能にこうした偏りがある結果、“夢見”（夢に見る…視覚の一種と解され得る）という表現を耳目にすることはあっても、“摸見”（手に触れる…触覚を表わす）という表現に出くわした経験を持つ人は多くあるまい。

趙元任は「V見」の機能に存在するこの偏りに対して合理的な説明を試み、“夢見”は意志によるコントロールができないが、“摸見”は意志的動作に基づくものであるため、前者は許される一方で後者は成立し得ないとする³。趙元任は、「V見」が補語構造である以上、“見”が話し手の「非意志的な知覚」に関わるべきものであると認め、“摸”によって示される意志的動作が、“見”の持つ非意志性と撞着するために“摸見”が文法的に排除されると考えるのである。

ところが日常の行為において、話し手の意志にかかわらず「自然に触れた結果としての知覚の認識」があり得るわけであるから、この説明は合理性を欠いていることになる。とはいえ、現代漢語において“摸見”が普遍的に使用されないのは事実であり、この点において趙元任の観察は誤りで

1 例えば呂叔湘1980, p262は“見”について、「作動結式第二成分，表示感覺到。多和視覚，聴覚，嗅覚等有關。中間可插入‘得，不’」（補語構造の第二番目の成分になり、『感覚が感じとられる』ことを表わす。中間に“得”や“不”を挿入できる）とする。多くの文法書や辞書はこの見解に倣っている。

2 劉・藩・故1983, p332は「一般只用於“看，瞧，瞅，望，聽，聞”之後（一般には“看”“瞧”“瞅”“望”“聽”“聞”の後ろにだけ使用される）」と説明する。現代漢語においては、これら以外には“碰見”（及びそれに類する“遇見”）が用いられるにとどまり、その使用範囲は限られている。

3 Yuen Ren Chao (趙元任) 1968, p448。

はない。

しかし実は、「V見」の歴史を遡ると、趙元任にとってあり得ないはずの“摸見”がかつて存在した事実を見出すことができる。

以下に、“摸見”の可能補語構造と結果補語構造を合わせて示す。

1. 四下裏摸看，若摸得他見時，我們且不要打他，只交他扶我們三個出佛肚去。(二十回本《平妖伝》10) (周囲を触ってみて、もしあいつを手に触ることができたら、あいつを殴ってはいけない。あいつに、この仏像の腹の中から我々三人を助け出してもらわなくてはならないのだから)
2. 舒手被裏，摸見他還沒脱衣裳，兩隻手齊插在他腰裏去，說道。(《金瓶梅》38) ([西門慶は] 蒲団の中に手を伸ばして触り、彼女がまだ服を脱いでいないことを見てとると、両手を彼女の腰に差し込んで言った)

このように複数の作品に見い出すことができるからには、これらの用例を、特定の作品の成立事情(版本の信頼性や方言の特殊性など)による例外的なものと思なすことはできない。“摸見”はかつて確かに存在したのである。

拙論2001aが明らかにしているように、「V見」が感覚一般の知覚に関わる機能を持つかのような姿を示すのは、“見”という動詞が視覚の他に聴覚をも示す多義語であった上に、偶然にも聴覚動詞と嗅覚動詞が同形を呈したことによる⁴。そのため、「V見」は聴覚や嗅覚にまで拡張されることはあっても、触覚と結び付くことはもともと期待できないのである。

にもかかわらず、“摸見”の存在から推測できるように、漢語変遷史の一段階においては、「V見」が視覚・聴覚・嗅覚の限界を越えて触覚にまでその応用範囲を広げるかのような動きを示した時期があったらしい。

そこで小論は、かつて“摸見”が存在した事実の背景に、「V見」型補語構造拡張の趨勢が潜んでいると認め、これまで注意が向けられることのなかった非視覚・非聴覚・非嗅覚型の「V見」に注目する⁵。そして語法史研究の観点からこれらの語を追跡し、「V見」型補語構造が如何なる過程で拡張や収縮を実現したかを分析することにより、近世漢語から現代漢語にかけての「V見」の一樣相を明らかにしようと試みる。

4 詳しくは拙論2001a。なお、小論で「V見」型補語を論じる際、“聽見”や“聞見”も対象として含むべきであるが、“看見”と“聽見”及び“聞見”の関係については、拙論2001aで既に明らかにしているので、“聽見”や“聞見”について、ここであらためて論じることはしない。

5 ここで言う「非視覚・非聴覚・非嗅覚型」とは、「V見」のV相当部に使用される動詞が視覚・聴覚・嗅覚のいずれにも属さない動詞である例を指す。すなわち、注2で挙げた“看見”“聽見”“聞見”“望見”“聽見”“聞見”“碰見”“遇見”以外の「V見」型補語のことである。

2. 中古漢語から近世漢語にかけての「V見」

補語構造としての「V見」は、中古漢語期にその姿を明確にし始める。例えば「相師看見」（《賢愚經》11）⁶、「樓高望不見」（《西洲曲》）、「窺不見底」（《水經注》）⁷などが初期の例として知られている。これらの用例では、いずれも「V見」のV相当部分に「見る」という意味の動詞が用いられている事実を、共通点として指摘できる。

しかし「V見」で使用される動詞は「見る」という意味を持つ語に限ったものではなく、視覚に関連しさえすれば、他の動詞であってもよい。

3. 山東有石鏡，照水之所出。有一圓石，懸崖明淨，照見人形。（《水經注》39廬江水）（山の東に石鏡という場所があり、照水という川の水源である。そこには丸い石があって高い崖になっていて明るく滑らかで、人の姿が映って見える。）
4. 猛地回身來合并，床兒畔一盞孤燈。兀良，早則照不見伴人清瘦影。（《倩女離魂》4）⁸（〔魂の離れた肉体が〕さっと身を翻して〔魂と肉体が〕一つになると、寢台のそばには灯火が一つだけで暗い。ああ、幸いなことに瘦せた姿ははっきり見えない）

これらの例では、光に照らし出される姿を目で認識するという意味で“照見”が使用されている。同様に、以下の例も視覚に頼って対象を認めるものである。

5. 家丁三人中兩人分路覓去，終日覓不見，想知早到城裏家中隱藏。（《入唐求法巡礼行記》4〈会昌五年五月十六日〉）⁹（家の役夫三人のうち二人が手分けして〔脱走した僧を〕探したが、一日中見つけることができなかった。思うに町の中の家に隠れているのだろう）
6. 忽聞夫至，喜不自勝，喜在心中，面含笑色。行至家，向北堂覓見其夫，得見慈母。（《秋胡變文》）（〔家の外にいた妻は〕夫が帰ってきたことを聞くと、とても喜んでうれしさが心にも表情にも現われた。家に行って北堂で夫に会い、母親に会った）

“覓”について、《玉篇》には「覓，索求也」（《玉篇》4）とある。部首に「見」を持つことから推測できるように，“覓”は本来、視覚に関わる動作を指す動詞である。そのため、視覚という要素が、「V見」に“覓”を採用させることを可能にしていると考えられる。

同様に、目に関する動作を示す動詞として“盼”も「V見」を形成する。例えば次の如き例である。

6 太田辰夫1958, p183が既に指摘している。

7 これらの二例はいずれも楊建國1959, p43が既に指摘している。

8 《元曲選》に拠った。この部分はテキストにより異同が少なくないが，“照不見”に関して、例えば脈望館鈔校本《古今雜劇》との間で違いはない。

9 この用例は、拙論2001aが既に指摘している。

7. 婦人盼不見西門慶來，每日茶飯頓減，精神恍惚。(《金瓶梅》17) (李瓶兒は、待っても西門慶の姿が見えないので、毎日食事の分量が減り、頭がぼんやりしていた)
8. 山霧濛濛，盼不見重重城郭，村庄寂寂，都是些小小人家。(《鼓掌絕塵》12) (山霧が立ちこめて村を囲むりっぱな塀が見えず，村は静かでどれも小さな人家ばかりだ)

“盼”にも「目」の部首が含まれているように，この語は“覓”と同様，目の動作に関わりながら「求める」という意味を示すものである。したがって“覓見”や“盼見”は「視覚」という共通性に基づいて，“看見”及び“望見”の延長線上に発生したものであると考えられる。

“覓”や“盼”にはいずれも「求める」という要素が含まれるため，“覓見”及び“盼見”の存在によって，「目に頼って求める動作」を示す動詞が「V見」に採用されるよう促されることになる。おそらくこうした例の存在が背景となったためであろう，「探し求める」という意味を持つ動詞も「V見」に採用され，“尋見”が早くから成立する。

9. 有人掘地，見一處土，其色黃白，與傍有異。尋見一物，狀人兩唇，其内有舌，鮮紅赤色。(《古小説鉤沈》〈旌異記〉) (誰かが地面を掘ったところ，ある場所の土の色が黄白色で他の部分と異なっていた。そこから物体を探し当てたのだが，その形状は人の唇のようで中に舌がついていて真っ赤な色をしていた)
10. 只說陳辛去尋妻，未知尋得見尋不見。(《清平山堂話本》〈陳巡檢梅嶺失妻記〉) (さて陳辛は妻を尋ねに行くのだが，いったい尋ねあてることができるやらどうやら)

さらに“尋”が“覓”と結合し，“尋覓不見”も成立する。

11. 那六兄弟，慌慌張張，前後尋覓不見，一齊吆喝道。(《西遊記》6) (六兄弟は慌てふためき，そばに〔孫悟空を〕探し当てることができず，声をそろえて大声をあげた)
12. 此乃小人十九年前失散之主人也。彼時尋覓不見，不意被倭賊擄去。(《古今小説》18) (このお方は私が19年前に離ればなれになったご主人様です。あの時，探し当てることができませんでしたが，なんと倭寇に連れ去られていたのです)

「探し求める」という意味を持つ語として白話文体で“找”が好まれるようになると¹⁰，“找”も“覓と結びついて「V見」を構成する。

13. 那老蚌也有神通，煉得韜光閉影之法，竊取月光以後，沈到那重淵幽窟，龍王夜又找覓不見。(《統金瓶梅》61) (真珠貝には靈力が備わっており，自分の美しい姿を隠す術を心得ており，月光の輝きを吸い取ってからとても深いところに身を潜めるので，龍王や悪鬼で

10 大島1996aに拠れば，“找”が普及するのは比較的新しい時代のことである。

もそれを探し出すことができない)

さらに“尋”や“找”以外の動詞であっても、「探し求める」という意味を持つものであれば「V見」で使用することが可能となる。

14. 從僧房裏到廚下，淨頭，庫堂，都搜不見。(二十回本《平妖伝》12) (僧坊から台所・便所・庫裡まで見たが、探し出すことができなかった)

上例では“搜”という動詞が「V見」に採用されている。この動詞によって示される「探し求める」という動作は、視覚に頼って行為が行なわれるとは言え、実際には手による行為を表わすものである点に注意が向けられてよい。「V見」に選ばれる動詞が、視覚動詞から触覚動詞へと拡張しつつある過程を、この事実を読み取ることができるからである。

このように近世漢語においては、視覚以外の動詞も「V見」に選ばれることが可能であり、その際、「手で探し求める」という意味を持つ動詞が「V見」に採用される。“搜見”以外の例を挙げると以下のようなものである。

15. 王觀察就帶了房主人，東西四下裏去跟尋，州南走到州北，捉拿不見。(《水滸伝》3) (王觀察は宿の主人を連れてあちこち街中を東西南北に探し回ったが、〔魯達を〕捕まえることができなかった)
16. 即時差人捉婆子，婆子説兒子朱真不在。當時搜捉朱真不見，却在桑家瓦裏看耍。(《醒世恒言》14) (直ちに人を向けて母親を捕まえさせたところ、母親が息子の朱真はいないと言う。すぐに朱真を探し出して捕まえることができなかったが、朱真はなんと桑家の盛り場で遊んでいたのだった)

かくて「V見」で使用される動詞は、目偏の動詞から手偏の動詞へと拡張される。「V見」は「視覚の認識」を示すものから「触覚の認識」を表わすものへと拡がりつつあるかの如くである。

3. 「手による動作」への「V見」の拡張

《金瓶梅》には、第1章に挙げた用例(例文2)以外にも、いくつかの“摸見”が存在する。

17. 金蓮就舒進手去，被窩裏摸見薰被的銀香球，說道：“李大姐生了彈這裏。”(《金瓶梅》21) (金蓮は手を伸ばして掛け布団の中に手を入れてまさぐり、それが掛蒲団用の銀製香炉だということを見てとったので言った。「李姉さんがこんなところに卵を生んだわ」)
18. 少頃，婦人脱了衣裳，西門慶摸見牝牛上並無鬣毛，猶如白馥馥，鼓蓬蓬，軟濃濃，紅縹縹，緊揪揪，千人愛萬人貪，更不知是何物。(《金瓶梅》4) (あまりに露骨な性描写につ

き、訳は付さない。以下同じ)

19. 掩上房門，褪去衣褲…婦人乃躡起一足以手導那話入牝中，兩個挺一回，西門慶摸見婦人柔膩牝毛疏秀。(《金瓶梅》37)
20. 見西門慶脫了衣裳坐在床沿上，婦人探出手來把褲子扯開，摸見那話，軟叮當的，托子還帶在上面。(《金瓶梅》61)
21. 婦人于是自掩房門，解衣鬆珮…原來西門慶知婦人好風月，家中帶了淫器包在身邊，又服了胡僧藥。婦人摸見他陽物甚大，西門慶亦摸其牝戶，彼此歡欣，情興如火。(《金瓶梅》69)

第1章で述べたように、趙元任の理解に基づけば、“摸見”は存在し得ないはずのものである。しかし近世漢語には複数の“摸見”がこのように使用されている。

“摸”や“捉”が“見”と結びついて補語構造を構成することがある以上、同じく手の動作を示す“摸”が「V見」に採用されても不思議ではない。そのため、“摸見”という補語構造の成立を支える文法上の力は、「目で探し求める」から「手で探し求める」へと拡大を促した力に他ならないと推測できる。しかし、この用法の存在に基づき「V見」の機能が「視覚」から「触覚」へ拡張したものと理解することは性急であろう。というのは、「V見」で採用される動詞の範囲が目偏から手偏に拡大したとは言え、知覚の認識の過程においてはあくまでも視覚が介在しているからである。

例えば前掲例14～16の“摸不見”“捉拿不見”“摸捉不見”などは、「手を使用して探し求め」、その動作の結果が「目によって認識される」ことを示している。同様に、上例の《金瓶梅》の例文においては、文の前後に“脱”“褪”“解衣”(いずれも「服を脱ぐ」の意)などの語によって描写される部分があることから見ても、“摸見”は、「手で触れた結果が(服を脱いだ裸の状態)目によって認識される」と理解すべきものであると考えられる。とりわけ例文18においては、“摸見”の後ろに色彩描写が伴う事実も、この見解を支持する材料となろう。

さらに例文17について、詞話本(《新刻金瓶梅詞話》)は“被窩裏摸。見熏被的銀香球”と句読を打つ。この句読に基づけば、当時この“摸見”は1語ではなく、2つの語法単位として理解されていたことになる。

しかし、詞話本の他の“摸見”にこうした句読が認められない上に、崇禎本(《新刻繡像批評金瓶梅》)はこの部分を“被窩裏。摸見熏被的銀香球兒”と読ませるので、この部分を“摸/見”と見るべきか“摸見”と読むべきかについてはなお検討を要する。とは言え、詞話本に“摸。見”という句読が行なわれている事実は、“摸見”内部の結合力が十分に強くなかったことを示している。そのため“見”について見れば、この語の本来の意味がなお保存されていると判断できる。したがって、当時の“摸見”の“見”は「触覚の認識」を表わすものではなく、あくまでも「見える」という本来の意味を保存したままであると考えられる。この点について、“聽見”や“聞見”では、音や匂いが認識される過程において視覚が一切介在していないことと比較すると、その間の差違は明瞭である。

以上から次のように言うことができる。近世漢語において“摸見”が成立したのは、補語構造

「V見」の機能が「視覚の認識」を越えて「触覚の認識」へと発展したためではなく、「V見」のV部の動詞として採用される動詞の範囲が、「目で探し求める」から「手で探し求める」へと広がっただけの、ささやかな拡張の成果であるに過ぎない。

4. 「心理動作」への「V見」の拡張

このささやかな拡張は、しかし「V見」に採用される動詞が、視覚動詞に限られるという制限を超越することを意味している。そのため、「V見」に取り込まれる動詞の範囲はさらに広がり、目偏や手偏以外の動詞もその対象になり得ることとなる。その結果、非視覚・非聴覚・非嗅覚・非触覚型の動詞までもが「V見」型補語構造を構成する。すなわち“等見”がそれである。

22. 立了一會，轉了一會，尋了一會，靠了一會，呆了一會，只是等不見那女娘子來。(《熊龍峯四種小説》〈張生彩鸞燈傳〉) ([男は巡り会いの場所で] 立ったり，うろうろしたり，探したり，体をもたせかけたり，ぼんやりしたりしたが，待っても女の姿を認めることはできなかった)
23. 船多認不出，過了兩日，並不見影。大分等不見我，先自回了。(《歡喜冤家》23) (船がたくさんあって，自分の船がどれかわからないまま二日を過ごしてしまったら，船がすっかり見えなくなりました。たぶん私を待ちきれずに先に帰ったのでしょう)
24. 我在書鋪裏看了會子書，等不見他們，我就來了。(《醒世姻緣伝》37) (私は本屋で少し本を読んでから，待っても彼らの姿が見えないので帰って来ました)
25. 且説衆人等他不見，板兒沒了他老老，急的哭了。(《紅樓夢》41)¹¹ (さて，みんなは彼女を待ちきれず，板兒はお婆ちゃんがいなくなったので焦って泣いた)

これらの例で使用されている動詞“等”は、「目で見ると」わけでもなく、「手で探す」わけでもない。「心で待つ」のである。中世漢語において“看見”“望見”などを原形に発生した補語構造「V見」は，変遷過程の中で“等見”という姿まで実現することとなった。

“等見”は視覚・聴覚・嗅覚・触覚のいずれにも属さない動詞が採用されているという点で，他の「V見」と大きく異なる。そのため“等見”を，「V見」が知覚全般にまで拡張された例として扱うことができそうではある。

しかし第2章で挙げた“覓見”や“搜見”と本章の“等見”とを比較すると，そこに一つの共通点が存在することに気づく。それは前者が「目や手で求める」であり，後者は「心で求める」という点である。つまり，両者はいずれも「求める」という点で連続性を保持している。したがって，“等見”が成立する背景には，「目で見ると (看見)」→「目で求める (覓見)」→「手で求める (搜見)」→「心で求める (等見)」という拡張過程が存在するものと考えられる。

11 程甲本に拠った。

かくして“等見”は「V見」型に属するにもかかわらず視覚動詞を要求しないため、“看見”から大きく離れた地点にまで進化したかのようである。しかし“等見”は，“等”（待つ）という行為を行なった結果、対象を「視覚によって認識する」という意味を表わすわけであるから、結局は視覚を示す補語構造としての機能から逸脱していない。“等見”は現代漢語に継承されていないため異なった語法によって成立しているかのように見えるが、それを成立させる力は、“看見”に認められるものと同一である。したがって、“等見”の場合も、補語構造としての機能が「視覚の認識」から「知覚一般の認識」へと拡張されたものとは認められない。

5. 視覚型「V見」の知覚一般型「V見」への擬似的接近

しかし一部には、「視覚の認識」という制限を越え、「知覚一般の認識」へと接近しているかのような姿を呈する用例が存在する。

26. 阮良當先趕至陳家，陳大姐正呆坐在炕上，對着一盞孤灯，等不見個消息。（《醉醒石》9）
（阮良が急いで陳家に行ってみると、陳大姐がちょうどぼんやりとオンドルに座り、暗い灯火に向かって知らせを待ちあぐねていた）
27. 鄉約等不見楊春回話，又叫人傳了話來，說：“你叫他到城裏去打聽這大爺的性兒。”（《醒世姻緣傳》34）（郷約は楊春の返事を待っても返事がないので、また人をやって伝えさせて言った。「おまえは彼を町にやって県知事様のご気性を聞いてみるといい」）
28. 這太太，因等不見喜信，正在卸妝要睡，聽得外面喧嚷，忙叫人開了房門，出去打聽。（《兒女英雄傳》1）（奥様は合格通知を待ってもその知らせが来ないので、ちょうど化粧を落として寝ようとしたところ、外が騒がしくなり、急いでドアを開けて尋ねさせた）

ここでは“等見”の賓語として、“消息”“回話”“喜信”が選ばれている。

上例を観察すると、これらの「V見」は「心で求めた結果、視覚によって認識」することを表わすのではなく、「心で求めた結果、聴覚によって認識」することを示していると理解できる。そのため、これらの例は、第4章で見た“等見”とは些か異なるかのようである。

こうした例に「V見」の進化を読み取ろうとすれば、「V見」が「視覚による認識」から「知覚一般の認識」へと歩を進めつつあるかのように理解できる。

しかし実は、“見”には音声と結合する特性がもとよりあり¹²、そのため“見”を内部に持つ補語構造が音声情報を賓語として従えることは、決して奇異なことではない。“見”が音声に関する語を賓語として従える特性を具えるからこそ、“聽見”が早くから成立しているのである。

したがって、上掲“等不見”の用例は、“等見”が“聽見”の用法を吸収しつつ成立したものと

12 拙論2001a, p277で指摘した例の他に、“不見甚麼消息”（《初刻拍案驚奇》26）や“不見声響”（《二刻拍案驚奇》23）など。これらの例では、いずれも「見」の賓語として音声を示す語が使用されている。

考えることができる。つまり、「等見」が「知覚一般の認識」へ接近したのではなく、もとより存在する「聴覚の認識」と合流しただけに過ぎない。そのため、この例をもって「V見」が「知覚一般の認識」の機能を身につけつつあると判断することは適当でない。

6. 「V見」縮小と「V到」の拡張

「視覚による認識」から離れないという限界の中であるとは言え、採用される動詞の範囲を拡張してきた「V見」は、しかし現代漢語の時代になると、その趨勢に大きな変化を生じる。民国期を迎えると、「V見」は一転して縮小の傾向を明確にする。

「V見」の変遷を概観するため、“看見”“摸見”“等見”を例にして、近世漢語から現代漢語への継承関係を表に示すと以下ようになる¹³。

(表1) 「V見」型補語の変遷

	看見	摸見	等見
近世漢語	○	○	○
現代漢語	○	×	×

(○印は用例が存在することを示し、×印は用例が存在しないことを表わす)

ここで“看見”“摸見”“等見”の三動詞を例に挙げたのは、それぞれが「目に頼って実現される認識」「手に頼って実現される認識」「心に頼って実現される認識」を代表するものだからである。

この表に示される如く、“看見”以外の「V見」はいずれも現代漢語に継承されない¹⁴。かつては拡張を志向した「V見」が、現代という時代を迎えてたちまち縮小に向かうのである。これはいったいどうしたことであろうか。

一般に、言語変化を促す要因として、新しい環境によって生じた新しい語法が、古い語法との間で相克作用や相生作用を働かせることが考えられる。

ここで思い当たるのが、「V見」型補語と類似の形態と機能を持つ「V到」型補語である。そこで「V見」と「V到」の両型について、その変遷を時代別にまとめると以下ようになる。

(表2) 「V見」型補語と「V到」型補語の変遷

	V見			V到		
	看見	摸見	等見	看到	摸到	等到
近世漢語	○	○	○	○	○	○
現代漢語	○	×	×	○	○	○

13 注4で述べたように、“聽見”や“聞見”に関わる問題は拙論2001aで既に明らかにしているの、小論の対象としては扱わない。そのため本章の表でもそれらを取りあげない。

14 “找見”(探しあてる)は現代文学作品に時として表われることがある。小論第2章で述べたように、“找見”は中古漢語の“覓見”や“尋見”に連なる末裔であるので、“看見”の類例として現代語で受け入れられやすいのであろう。

視覚に関するものを除けば、「V見」が近世漢語でその生命を終えるのに対し、「V到」は現代漢語にまで継承される。しかし実は近世漢語の「V到」と現代漢語の「V到」は同質のものではない。清末を境にして、「V到」は名詞性賓語（ここで言う名詞とは場所詞や時間詞を含まないものを指す）を後置する機能において、それ以前とそれ以後とは大きく異なる。「V到」の名詞性賓語を伴う機能について時代別にまとめると、以下のような差が存在する。

(表3) 名詞性賓語を伴う機能から見た「V到」の変遷

	看到+N	摸到+N	等到+N
近世漢語	△	×	×
現代漢語	○	○	○

(Nは名詞性賓語を示す。また△印は、その萌芽的形態が存在することを表わす¹⁵⁾)

このように、近世漢語の「V到」が名詞性賓語を伴うことが困難だったのに対し、現代漢語の「V到」はそれが可能である。たとえ近世漢語の「V到」が名詞性賓語らしきものを従える例を確認できても、実はそれは場所詞または時間詞と認定すべきものである¹⁶⁾。例えば、「看到後園」(《醒世恒言》32)は「裏庭が見える」を意味するのではなく、「(歩いて)見ながら移動した結果として裏庭まで見る」と理解されるものである。

以上の表の内容に基づき、賓語を従える機能について概観するため、「看」を除く二動詞を例として「V見」と「V到」の変遷をまとめ直すと以下ようになる。

(表4) 名詞性賓語を伴う機能から見た「V見」と「V到」の変遷

	V見+N		V到+N	
	摸見+N	等見+N	摸到+N	等到+N
近世漢語	○	○	×	×
現代漢語	×	×	○	○

このように、「V見+N」と「V到+N」は相補分布をなす。

一般に、「V見」と「V到」の機能を比較すると、前者が「知覚の認識」を示すのに対し、後者は「行為の実現」を表わすという点で、両者の間に歴然たる差が存在するとされる。しかし現代漢語の「V見」と「V到」はともに後ろに名詞性賓語を伴うことができ、実際の運用にあたって

15 「看到+N(名詞性賓語)」が広がり始めるのは明代後半頃と考えられるが、それ以後も萌芽的形態の特徴を維持し続け、現代漢語の「看到+N」とは異なるので、「△」印を付した。大島1995, p110は「《水滸伝》には…“看見”の意で用いる“看到”(引用者注:名詞性賓語を後置して動作の実現を示す用法の“看到”のこと)の用例のないことに気付く」と述べる。なお、萌芽的形態については拙論2002に詳しい。また、「等到+N」の例は、清末作品からわずかに用例を見い出すことができるが、それを現代漢語への過渡的形態と認め、近世漢語に属するものとは扱わないので「×」印を付した。

16 拙論2001b及び拙論2002でも触れている。

は、意味の上でも大差を生じることは少ない。個別の「V見」や「V到」の用法について、耳にしたその場でネイティブスピーカーに質問した場合、しばしば「『V見』を『V到』に置換可能」という回答を得る経験を持つのは、筆者だけではあるまい。現代漢語において、「V見」と「V到」は時として強い類似性を持ち、その結果、高い互換性を有する¹⁷。とすれば、この二つの補語構造は、現代という新しい言語環境において、互いに干渉作用を発揮せざるを得なかったはずである。

そこで表4を観察すれば、近世漢語において「V見」が具えていた機能を、現代漢語では「V到」が担っていることが知られる。これはとりもなおさず「V見」の機能を「V到」が継承したことを意味する。すなわち「V見」から「V到」への交代が生じているのである¹⁸。

近世漢語において、例えば「ものが見える」と表現するためには“看到”を採用することはできず、“看見”を選ばなければならない¹⁹。なぜなら当時の「V到」はその賓語として場所詞または時間詞しか伴うことができなかつたからである。

それゆえ、賓語を伴う補語構造の選択肢が限られる環境にあつては、「V見」は利用価値が高く、好んで用いられることになる。結果、「V見」は環境の要求に答えるべく、使用範囲の拡張を試みる。かつて「V見」が目偏の動詞の範囲を超えて手偏の動詞（“捜見”）からさらにその先（“等見”）にまで範囲を広げたのは、そのためであつたらう。

しかし「V見」が拡張を試みようとする、大きな障害に出くわすことになる。それは「視覚による認識」という制限である。「V見」が補語構造内に“見”（見える）という要素を内包している以上、この宿命から逃れることは難しい。近世漢語において「V見」が拡張の趨勢を見せながらもその範囲が十分に大きくならなかつたのは、おそらくこの制限によるものと推測できる。

こうして変遷を続けてきた「V見」は、やがて現代という時代を迎えた時、新たな困難に直面する。それは「V到」が賓語を従える機能を新しく身につけたために生じた競合である。

すなわち、これまで「V到」と「V見」との間で保障されていた分業関係が消滅し、「V到」は名詞性賓語を求めて「V見」の領域に侵入する。この結果、両者の文法機能は重複し、両者は生存をかけて互いに争う。この時、「V見」にとって不幸だつたのは、「視覚による認識」という機能上の制限が「V見」に負担を強いたことであつたらう。「V到」にはどのような動詞でも適合するが、「V見」に用いられる動詞には、直接または間接に視覚に関わるものしか採用できない。事態がここに至れば、両者の争いの結末は明らかである。こうして「V見」は拡張の趨勢を放棄し、それまで担っていた機能を「V到」に譲ることになった。

かくて「V見」の多くは「V到」によって淘汰され、“摸見+N”“等見+N”は姿を消し、それ

17 成戸2000及び2001は「V到」と「V見」の違いを明らかにしつつ、両者を比較した上で「（『V到』と『V見』のうちの一方がもう一方より）betterである」という表現を繰り返す。これは氏の意図とは裏腹に、「V到」と「V見」が機能の点で如何に接近しているかを物語る。

18 大島1996b, p60は、歴史的な観点から見て「“看見”“聽見”が先に用いられ、後になって“看到”“聽到”が並行するようになり、現在に至っている」と述べる。

19 近世漢語では「V着 zháo」も名詞性賓語を後置できる。そのため、文脈によっては“看着”を選ぶことが可能である。ただ“看着”には明確な意志性が含まれるので、今の場合、“看見”との単純な比較はできない。「V到」と「V着」については、大島1995及び大島1996bにも詳しい。

らが担っていた機能が新興の“摸到+N”“等到+N”によって継承された。しかし「V見」に属しながらも相変わらずそのままの形態で現代漢語にまで生命を保ち続けることのできた一群が存在した。それが“看見”“瞧見”“瞅見”などである。視覚に関連するこれらの語は、「V見」の機能にふさわしいため、現代漢語に生き残ることを許されたわけである。

7. 現代漢語における“摸見”の再生と「V見」の再拡張

さて、現代漢語においては、趙元任の否定の言葉（小論第1章）にもかかわらず、“摸見”の姿を時として垣間みることができる。常用されることはないにしても、一部のネイティブスピーカーの語感においてその許容度は低くない²⁰。現代漢語では“摸見”に大きな拒否感が示される一方で、“摸見”に対する抵抗感が小さいのはどうしたわけであろうか。

そこで現代漢語における「V見」の環境を観察すると、既に“摸見”が消滅している以上、手偏の動詞が共通して具える「手で求める」という要素によって“摸見”の存在が支えられているとは考えにくい。ここには別の力が働いていると見なければならない。

語法史的な観点から言えば、「V見」は起源が極めて古く、一千数百年以上の歴史を持つ。この長い時間の流れの中で、多くの補語が発生と消滅を繰り返したが、「V見」は例外的にその姿を長期にわたって保持して来た。“看見”や“聽見”が常用語として認識され得る語であっても、それはこれらがたまたま視覚や聴覚の表現に関わるものである結果として使用頻度が高いためであるに過ぎない。歴史的な変遷過程に基づいて見た場合、実は「V見」は既に生産性を失った古色蒼然とした語法である²¹。したがって、現代漢語における“看見”“聽見”“聞見”などは、古形保存としての例とも言うべきものである。

一般に、新時代の言語に古形が保存された場合、それは孤立し体系性を失っているため、言語のシステムに大きな影響力を発揮することは稀である。しかし現代漢語に残った“看見”及び“聽見”“聞見”は、古形保存の例としては例外的に頻度が高く、しかも視覚・聴覚・嗅覚の三知覚があたかも一つの体系としてセットになっているだけに、その影響力は侮れない。

「V見」の知覚を現わす機能について見てみると、視覚・聴覚・嗅覚の三知覚が既に揃っており、五感のうち第四と第五の知覚（触覚と味覚）の地位は空席のままである。そのため、触覚や味覚に関するもので、形態や意味の面において合理的な要素を持つ例が現代漢語に存在すれば、その語はその空位を埋めるはずである。

20 現代漢語において「V見」型補語の受容度に地域差を見出すことができる。例えば、“聞見”さえも一部地域出身のネイティブスピーカーには明確に拒否される一方で、異なる地域では方言レベルにおいて現在でも“等見”が使用されると述べるインフォーマントも存在する。また“找見”は現代文学作品において時に見られるものであるが（小論注14）、この語を採用する作家の出身地にも偏りが認められる。そうした背景があるため、“摸見”に対する抵抗感の強さも個人により異なる事実が観察され、本章で述べる「『V見』の再拡張」には、「V見」型補語を現在でも豊富に保存する方言の作用が機能したことも推測できる。

21 郭1996は現代漢語の「V到」と「V見」を比較し、両者の差異を述べている。指摘された差違について引用者なりに言えば、「V見」の生産性は低いということである。

そこで“摸見”について改めて目を向けると、この語は“看見”“聽見”“聞見”と同じ形態を持つ上に、手偏の動詞の中では「無意識の知覚」と相性がいいことに気づく。試みに《新華字典》に基づいてこの語の意味を確認すれば、“摸”には“用手接觸或輕輕撫摩”と“用手採取”との二つがある。前者の用法で用いられる場合は「手を軽く撫でるように動かす」こと自体が目的であるから、対象に触れようとする行為者の意志性は低い。そのため、“摸”は「無意識の知覚（自然に感じとられる触覚）」にふさわしい動詞と言える。

となれば、この語は第四の知覚の空位を埋める資格を具えていることになる。“摸見”は現代漢語において復活する条件を具えているのである。したがって、現代漢語に時として姿を見せる“摸見”の正体は、近世漢語期以降、密かに質的転換を進めつつあった“摸見”であると解される。これはとりもなおさず、触覚を示す“摸見”が現代漢語に成立しかけていることを意味している。

この“摸見”は、姿は同じであっても、もはやかつての“摸見”ではあり得ない。近世漢語の“摸見”は「手で触れた結果を視覚によって認識する」ものであったが、現代漢語に姿を現わしつつある“摸見”は「手で触れた結果を触覚によって認識する」ものである。

こうして見ると、近世漢語の「V見」が具えていた多様な姿が失われた結果、現代漢語の「V見」はその機能を純化（視覚・聴覚・嗅覚の三知覚に限定）させ、純化させたその機能に頼ることで、視覚・聴覚・嗅覚の三知覚から第四の知覚へと拡張させ、起源の古い“摸見”に「触覚の認識」という最新の機能を与えることに成功しつつあると言えよう。

かくて補語「V見」は、ここに至って視覚・聴覚・嗅覚・触覚の各知覚を認識する機能を身につけ、その結果「知覚一般を認識する」機能を成立させ始めた。この機能は、現代漢語の「V見」の機能に見かけの上で存在する「空位の知覚」を埋めるべくして成立したものである。しかし語法史的に見た場合、もともと「空位の知覚」は存在しないのであるから、“摸見”は過剰な適用によって作り出されたものと見なさなくてはならない。したがって、現代漢語の“摸見”の誕生は、「過剰一般化」(overgeneralization)によるものであると言える。

8. まとめ

小論は、「V見」型補語構造について歴史語法研究の観点から検討を行なうことで、これまで注目されることのなかった非視覚・非聴覚・非嗅覚型「V見」（“看見”“聽見”“聞見”の類以外の「V見」）がかつて存在した事実を指摘した。さらに中古漢語から近世漢語を経て現代漢語に至る用法を観察し、「V見」の変遷過程を明らかにすることを試みた。その結果、以下のことが知られた。

中古漢語に発生した補語構造としての「V見」は、初期には視覚動詞と結びつき“看見”や“望見”などの姿で現われたが、まもなく“覓見”（目によって求めて見える）を生み出した。これは“覓”が視覚に関わる動詞であったために「V見」が持つ文法機能に整合したからである。同じ理由で“盼”（目によって求める）も「V見」に採用されることとなり、こうして「V見」は「求める」という意味の共通性に頼って拡張することが可能となった。“搜見”は、この「求める」という機能の延長線上に発生したものである。この拡張はさらに“等”（待つ）をも「V見」に取り込

み“等見”を生み出した。

この結果、「V見」の機能は視覚を示すものから触覚を表わすものへ、そして知覚全般を表現するものへと拡張されたかの如き様相を呈した。しかし用例に検討を加えることにより、これらは「目で求める」—「手で求める」—「心で求める」という拡張過程に基づくものであると推測できることが知られた。この「求める」という行為は、手や心で求めながら、そうした行為の結果を目で認識しているので、これらの「V見」は実は「視覚による認識」を示しているに過ぎないと考えられる。したがって、近世漢語における「V見」の拡張は、採用される動詞の範囲が広がっただけのことであり、「V見」の機能が「視覚の認識」から「知覚一般の認識」へと拡張したわけではないと見なければならぬ。

近世漢語において、「V見」は、こうしてその趨勢を維持したが、現代漢語の時代に入ると、状況は一変する。「V見」で採用される動詞の種類が急速に減少し、その結果、“摸見”も“等見”も現代漢語に継承されない。

それと同時に、近世漢語には存在しなかった「V到+N（Nは場所詞や時間詞を含まない名詞性賓語を指す）」が現代漢語に出現し、それまで「V見+N」が担っていた機能を「V到+N」が担うようになる。

これは、現代に至って「V到」型補語が名詞性賓語を従える機能を身につけた結果、「V到」が「V見」の領域に侵入を始めたからである。こうして現代漢語において「V見」から「V到」への交代が進行し、近世漢語の“摸見”や“等見”は現代漢語において“摸到”“等到”に取って代わられることとなった。

しかし、このような環境にあっても、一部の「V見」はなおそのままの姿で現代漢語に残留した。その例が“看見”である。これは、「V見」が「視覚による認識」を示す機能を持っているため、“看”には「V見」がふさわしく、「V到」に駆逐されずに済んだからである。この結果、現代漢語において、“看”には“看見”と“看到”の二種の補語構造が共存することとなった。

こうした過程を経て、新興の「V到」が古い歴史を持つ「V見」に勝利を収め、“看見”及び“聽見”“聞見”のみが現代漢語に生き残ることを許された。急速に力を失った「V見」は、それまで持っていた多様な姿を放棄することとなり、「V見」で採用される動詞の種類は現代漢語において一気に減少した。

ところが、「V見」で採用される動詞の範囲が縮小された結果、それが「V見」の機能の純化へ繋がることとなり、思わぬ副次的効果が発生した。それは、五感のうち、視覚・聴覚・嗅覚の三知覚以外の「知覚の空位」を生み出したことである。そこで「V見」に「過剰一般化」(overgeneralization)が生じ、“摸見”は「知覚の空位」を埋めるべく、触覚を表わす補語構造として再生した。こうして、「V見」に視覚・聴覚・嗅覚・触覚のそれぞれの知覚の認識を現わす機能が整い、「知覚一般の認識」という新しい機能が与えられることになった。但し、触覚を表わす“摸見”は現在成立しつつあるものであり、そのため、その姿を時として垣間見ることが出来る程度であるに過ぎない。

参考文献

- 伊原大策 2001a <結果補語構造『V見』の発生とその変遷>《日本中国学会報》53
- 伊原大策 2001b <『夢見』の『見』は何を『見る』>《筑波大学東西言語文化の類型論》特別プロジェクト研究成果報告書》IV
- 伊原大策 2002 <結果補語“V到”における「移動」と目的の達成>《筑波大学東西言語文化の類型論》特別プロジェクト研究成果報告書》V
- 大島吉郎 1995 <‘動・到’と‘動・着’の分布について(三)>《大東文化大学紀要》33
- 大島吉郎 1996a <‘找’考>《語学教育研究論叢》13
- 大島吉郎 1996b <‘動・到’と‘動・着’の分布について(四)>《大東文化大学紀要》34
- 太田辰夫 1958《中国語歴史文法》江南書院
- 郭雲輝 1996 <“V到”と“V見”について>《お茶の水女子大学中国文学会報》15
- 成戸浩嗣 2000 <感覚動詞に後置される「一到，一見」(その1)>《愛知学泉大学コミュニティ政策学部紀要》3
- 成戸浩嗣 2001 <感覚動詞に後置される「一到，一見」(その2)>《愛知学泉大学コミュニティ政策学部紀要》4
- 楊建国 1959 <補語式発展試探>《語法論集》三 中華書局
- 劉月華・潘文娉・故麟 1983《實用現代漢語語法》外語教育與研究出版社
- 呂叔湘 1980《現代漢語八百詞》商務印書館
- 商務印書館 1988《新華字典》第6版 商務印書館
- Yuen Ren Chao (趙元任) 1968 A GRAMMAR OF SPOKEN CHINESE, University of California Press